特101

718

愛の研究

（浮世哲學第一編）

夢守人著

718

始

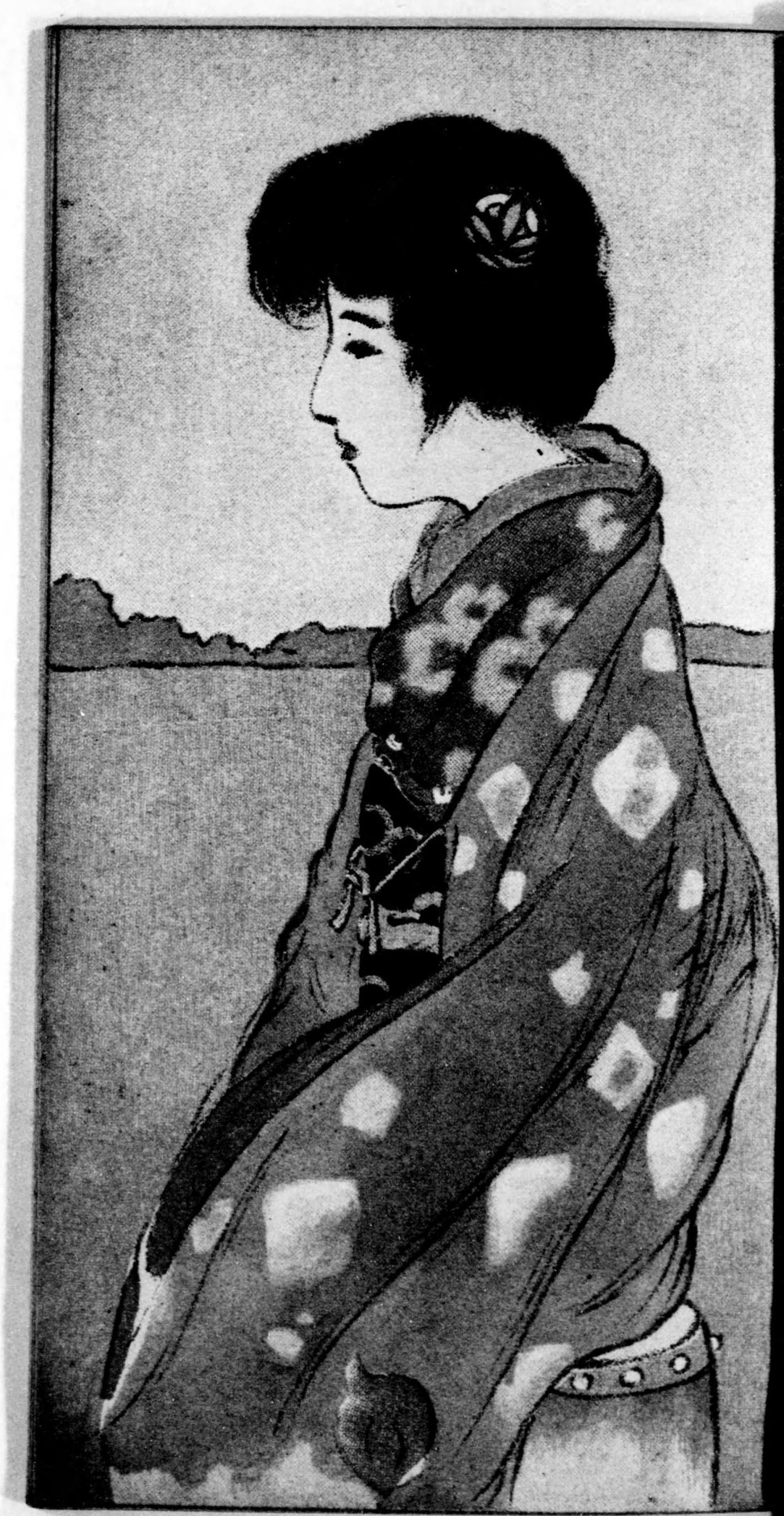
特101
718

愛の研究

（浮世哲學第一編）

夢守人著

大正
7. 11. 15
内交



序

小さい本だからと言つて馬鹿にはならない。愛と名のつくものゝ實例を集めて、それに說明と描寫を加へたものが本書である。どんな事が書いてあるか、是非一度讀むで見給へ「愛の死活」がちやうど繪卷物のやうに現はれて來るから。

文學的の思想を有つて筆を握つた本書は、ツマラナイ小併だましのやうな物とは譯が違ふ。著者は之れを名付けて淨世哲學と呼んでゐる程だから人と愛との問題は立派に解決される。先づ騙されたと思つて買つて見給へ。

愛の死活

誠實と熱心は――愛の勝利者
虚偽と尊大は――愛の失敗者
同情と趣味は――愛の養成者
移氣と我儘は――愛の破壞者
執着と肯從は――愛の保護者
反抗と短慮は――愛の敗北者

（目次）

▼君と別れて……五
▼美女と醜夫……一〇
▼月に佇つ影……一七
▼呟く聲に頷く聲……二三
▼愛の小唄……二八
▼浮世の常……三三
▼縺れてゆく糸……三九
▼趣味と愛……四四
▼虚偽の後姿……五〇
▼同情より愛へ……五五
▼愚痴と涙と……六一
▼愛の執着……六六
▼逃げてゆく女……七二
……【なはり】……

愛の研究

夢守人著

◆君と別れて松原行けば

『君と別れて松原行けば、松の露やら涙やら』……何といふ情緒の深い言葉であらう。末變らじと誓つた想思の男女が、なりゆきとは言ひながら、別れ〳〵にならなければ成らぬといふ事は、何方の身にしても、辛い悲しいことに定つてゐる。其處に戀愛の悶えが生じ

るのである。恨みも愚痴も湧いて來る。

田澤といふ青年が遠く自分から離れて了つてからは、彼女の心には拂へども盡きぬ雲りが懸つて、夜となく晝となく四六時中を、言ひ知れぬ遣瀨なさに囚はれてゐた。又しても青年の聲が聞えるやうな氣がして、恁う目を瞑ると顏までが現はれて來る。それと言ふのも一つは青年の愛情が何處までも徹底的に、しかも潤ひと暖味を十分に有つてゐたからであつた。十人の男が八人まで抱いてゐるやうな『女性に對する輕蔑の念』などは、微塵も有つてゐなかつた。

『僕はね、貴女と別れて遠くへ行くといふ事が、何よりも辛いのだけれど、事情が許さないから詮方がない。その代りいくら遠くへ離れてゐても、決して貴女の事は忘れないから、貴女も變らずに何時までも僕のことを想つてゐて下さい。』

『えゝ、そりや尤う妾は何時までも變りは爲ませんけれど、だつてね……。』と彼女の胸には制へ切れぬ疑惑の念が有つた。

『世間一般の男と云ふ者が、隨分薄情な眞似も爲てゐるのですから貴女から然う言つて疑はれるのも當然ですが、僕に限つては決してそんなのぢや有りませんから、その事だけは安心してゐて下さい。相互に慰められて來た今日までも、離ればなれになる明日からも、

二人の心には變りがない筈です。信じて下さい、僕といふ者の眞情は既に貴女には十分解つてゐるでせうから。』

『そりや仰有るまでもなく、貴郎の人格も趣味も皆よく知つて居りますわ。』

こんな談話を交して、東と西へ遠く離れて了つた二人は、その後一年あまりの月日は經つたけれども、花につけ雨につけ、兩方からの文通は絶えないでゐる。加之それが今時に珍らしい純な戀愛で、只だ心と心とが相通じたといふのだから、一層になつかしくそして尊いものである。

『今時分は何うしてゐらつしやるか知ら……。』

フト恁う思ひ出すと堪らなくなつて、彼女は秋の夜にすだく虫の聲を聞きながら、毎時よりは長い手紙を書いて送つた。

すると青年の方でも、なつかしさは同じだから、直ぐに返事を書いて寄越したのである。

『自然の秋はそゞろに物の哀を感じさせて、然うでなくても戀しい貴女の事が、つく〳〵懷かしく考へられます。恁うして遠く離れてゐると、顏も見られず聲も聞くことは出來ない。けれども氣を落着けてゐると、過ぎ去つた樂しい夢のやうな悅樂が、ちやうど繪卷

物をひろげて見るやうに、うれしく胸に描かれるのです。』

と言つたやうな意味の文面を讀むだ彼女は、新らしい希望が出來

るやうな心持がして、その手紙を幾度となく繰返して讀むだ。

◆美しい女と醜い男

よく世間の人達は『まるでお雛樣の夫婦のやうだ』と言つて褒める

が、それは美しい男と美しい女とが並むで歩いてゐるのを、半ば羨

望的の視線を送りながらの言葉であるけれども、果して萬全の幸福

であるかと言ふと、決して然うとばかりは斷定することが出來ない

顏と心は反對……と下世話に言ふのは餘り極端かも知れないが、

くら顏が美しいからと言つて、必らず美しい心を有つた女ばかりで

はない。美しい顏を有つてゐながら、鬼にひとしい心を有つてゐる

女が尠くない。虛榮心と嫉妬とに美人の通有性と言つても宜い。其

處へ行くと顏や姿の餘り美しくない所謂十人並の方が、同じ嫉妬や

虛榮が有るにしても、女性らしい優しさが十分に含まれてゐる美

人に限つて墮落に陷り易く、そして自分の美しさを鼻にかける自尊

心が強い。

男の顏がすぐれてゐれば、自然女の顏が十人並だし、女の顏が美

しければ妙に男の顔は餘り感心しない――と恁ういふ事をよく世間の人達は言つてゐるが、よく考へて見ると夫れは殆んど事實に近い話である、あんな醜い男がよくもあんなに美しい細君を持つてゐるものだ。と道を歩いてゐて、思はず振返らせられることが珍らしくない。

茲にある青年畫家があつて、それが何方かといふと、絶對に異性の近づくのを考へさせる程に、それほど人の目からは醜く見えてゐたが、二三年東京へ修業に行つてゐる間に、何時の間にか頗る美しい細君を連れて歸つて來た。

『君の怪腕には流石の僕も驚いたよ。どうして彼麼に美しい細君を手に入れたのだ、友人仲間でもそれが頗る問題になつてゐるんだから、一つ後學の爲めに最初からの成行を聞かして呉れないか。』

と一人の友は恁、言つたのであつた。すると畫家は只だ笑顔を見せてゐるばかりで、急には口を開かない。

『お願ひだから賴む、僕達も早晩娶らなくちやならないのだから、是非とも聞かして呉れ給へ。』

『ハツハ、、、飛んだ話に夢中になつてゐるね、醜男な僕が少しばかり美しい家内を有つたと言つて、何もそんなに問題にする程の事

はないぢやないか。』

『ところが隨分驚いてゐる奴も有るのさ。君怒つちや不可いよ、名前は隱して置くが、君の結婚は奇蹟だと言つてゐるんだ。僕達にしても少からず羨望してゐる譯さ。』

恁うまで言はれて見ると、さすがに畫家も默つてはゐられなかつた。彼は眞面目な顏で話した。

『實を言ふと僕は少年時代から、この僕の顏の醜いといふことが氣になつて、それが爲めになるべく、人と顏を合さないやうに爲た時も有つた。けれども、そんな事ばかり思つてゐた日には、肝腎の勉

强する事も出來ないから、大悟徹底に齊しい態度でひたすら勉强を爲るやうになつたのさ。ところが彼の女が弟子に入つて來たんだ。すると或時恁う言ふぢやないか「どうか先生のお嫁にして下さい」とそれが至極眞面目なんだから、最初は僕も變に思つたよ。それで僕が貴女のやうな美色であれば、どんな立派な家へでもお嫁に行けるのだから、好き好んで僕のやうな者を選ばなくかも宜いでせう、と恁う言つたんだ。』

『フム、隨分變つてゐるね。』

『ところが、妾は虛榮心などは少しも持ちたく有りませんから、そ

んなに言はないで何卒許して下さい。尤う兩親の承諾も受けてゐるんですから、と言ふもんだからね……』

畫家の眼には自信の色があつた。永年の間嘲けられたり冷笑されたり爲て來た苦痛も　漸と拭ふことが出來たと言ふ、然うした誇りも含まれてゐた。

つまり畫家には藝術の尊重を眼目として、そして少しの自惚も野心も有つてゐなかつたから、小町娘と評判されてゐた美女を妻に迎へることが能たのである。

◇月に立つ影

月光といふものは森羅萬象を詩的化して、日頃はそんなにも感心しない小川の流れや森の樣子に、一種のなつかしさと憧憬を抱かしめる　就中女性の美を發揮する點に於て、頗る日光は必要なものである。

おぼろ月夜の春の宵　櫻花の幹に身を靠せてゐる若い女の情趣は語らずとも『愛に惱む乙女』と言つた感じがある　それが別段深い物思ひに沈んでゐなくとも、見る者の目には何か意味が有りさうに思

はれる、其處に愛の芽生を感じるものが多い。

『貴女は何をそんなに考へてゐらしやるんです。』

と若し問ふ人があつたならば、やゝ含羞だやうな表情で、

『いゝえ、何も考へる事は無いのですけれど……』

『然し何ですな、ボンヤリとした此の月光は、實に名狀しがたい快味と憧憬をおぼえさしますね。』

恁うして青年は飽迄も春の宵を讃美する。

大川の上を照らしてゐる夏の月光には、何處となく浮ついた落着のないものであるが、橋の欄干に佇むでゐると、涼風とともに感傷

的な心持になつて來る。浴衣に浴びる青白い光は、夜の更けゆくと俱に神秘になつて來るのである。

『水に映つてゐる月を眺めてゐると、妾は妙に恁う物の哀れをおぼえて、亡つたお母さんの事なんかゞ想はれますわ』

恁う言つてうなだれる女の顔には追憶の念が漲つてゐる。

『僕にしても、いろんな事が胸に浮びますよ。不遇だとか失意だと言つたやうな事がね。』

青年の胸にも制へ切れぬ追慕の情が湧く。

中秋の名月は郊外の空から、その清い月光を投げてゐた。

『何とも言へない美い月ですね、金色夜叉の貫一ぢやないけれど、じッと月を眺めてゐると　何がなしに恨みの言葉でも言つて見たいやうな氣になりますね。』

『同じやうにこの名月を眺めてゐても、胸に想つてゐる事は十人が十人皆違つてゐるんでせうね。』

『隨分いろんな事を考へるものですよ、泣いたり怒つたり、また深く考へ込ましめるものは月影なんですから』

青年は恁う言つて、今更のやうに肩を並べて佇つてゐる女の顏を見た。何時とはなく近寄つて來た二人の愛が、その極致に達してゐ

るやうな心持がしたのである。

凍るやうな寒空に、貧しい母と子が手を引いて歩いてゐた。ちやうど十三日の月が物凄いまでに冴えてゐる。

『お母さん、近頃僕は恁う思ふんだよ。毎晩恁うして夕刊を賣つて歩くのは宜いけれど、何時になつたら二人が氣樂に暮せるのかと思ふと、夕刊なんか賣つてゐるのが馬鹿らしくなつて來るよ。』

言ひながら、少年は母の横顏を覗く。

『お前からそんなに言はれると、お母さんも辛いよ。儂さへしつかりお金儲けをすれば、何もお前は稼いで貰はなくても宜いんだがね

……何も因縁だとあきらめて辛抱してお呉れ。』

母親の聲は涙に曇つてゐる。それを慰めようとする少年の胸も晴れては居なかつた。

『お母さんと僕とは只だ二人きりの親子ですもの、僕はどんなに辛い目をしても、お母さんの悦ぶ顔を見るのが、何より樂みなんですから、尤う今後は泣言なんか言ひません……だけどね、僕達は何うしてこんなに貧乏なんでせう？』

少年は母の手を堅く握つて月を仰いだ。

◆私く聲に頷く顏

弟が放蕩三昧に身を持ちくずして、今では親から勘當されてゐるのを、兄は此上もない悲しいことと苦にして、何うにかして弟の身を元々通りに直したいものだと、いろ〳〵に心を碎いてゐた。

けれども墮落して了つた弟は、家形の長火鉢に丹次郎を極め込んで、そんな事とは夢にも知らなかつた。何處までも亂れた心で氣儘な夢の跡を辿つて行かうと爲てゐる。

『妾は近頃いろ〳〵考へてゐるんですが、貴郎の御都合で別れて了

つたら何うかと思つてますの。』

ある時、不意に藝妓の口からこんな言葉が洩れた。

『それでは尤う、お前は私に厭氣が差したのだな。』

男には殆んど寝耳に水であつた。いくらか腹立しさも交つてゐたので、言葉の内に針を含ませた。

『そんな譯ぢやないんですけれどね、お互にこんな事を爲てゐては何時まで經つても駄目だらうと思ひますわ。漸次に苦しくなつて行くばかりですから、それがお互の爲めですわ。』

『……。』男は默つて藝妓の顔を見詰めた。

『薄情い女だとお思ひかも知れませんが、妾の稼業は人氣で立つて行くのですから、恁うして貴郎と一緒に暮してゐると、人氣は落ちて行く一方でし……。』

藝妓の言ふところも無理ではなかつた。際限のない食客を置くほど生計が豊かでもないし、それが爲めに廓雀の噂も立つてゐるのだから、自然人氣にもさわつて來てゐるのであつた。

『然うか……ぢや二三日の間になんとか爲よう。』

男はキッパリ恁うは言つたものゝ、それは只だ意地に過ぎないので、差詰め身を寄せる處もないのであつた。

『あゝあ、僕は此家も追出されて行くのか……。』

恁う考へて行くと、今更のやうに自分の意氣地なさが感じられてそれと同時に藝妓といふものゝ薄情さが身に泌みた。

『誰か友達にでも會はないか知ら、何とか身の振方を付けなければならないが……。』

口の内で獨り言を云ひながら、彼は的もなく夜の往來を歩いてゐた。すると、淋しい道の十字街で、思ひもかけず彼は兄に出會したのである。

『こんな處では話は出來ないから、何處かの家へ入らう。』

とさすがは兄の愛情で近所の小料理屋の二階に連れられた。

『こんな姿を見せて、何とも面目次第も有りません。』

『イヤ、お前さへ然う氣がついて呉れゝば、これに越した悦びはない。私もお前の事が心配になつてゐるんだが、何處に居るのだか判らないものだから、何う爲ることも出來なかつたのだ。恁うして會つたのを幸ひに、安心して食つて行ける道を講じて進げよう。』と兄は暫時の間人知れず家を借りて、其處へ住まはせて呉れることにした。

『時節を待つて家へ入れるとして、差詰め私の言ふやうに爲てゐて

呉れ、決して悪いやうには爲ないから。』

何といふ愛情の溢れた言葉であらう。血縁の兄であればこそだと弟はうれし涙で感謝したのである。

◆愛の小唄

彼は藝妓の小染の愛を得たいものだと、隨分苦心をしたものだ。或時は芝居見物にも連れて行く、し、金の指輪も買つてやつたりしたけれどもそれは何の役にも立たずに、寧ろ冷笑されるやうな結果を得たのであつた『どう爲れば宜いと云ふんだらう』恁う思ふと幾らか

焦慮氣味にもなつて、是か非でも愛の專有を欲して歇まなかつた。

けれども、それの多くは徒勞に過ぎなかつたのである。此方が執拗く追蒐けて行けば行くほど、先方では逃げを張つた。それでも時によると漸と追付くことが出來て、捉へた袖を飽迄も離すまいと努めたけれど、それは眞の一時的のものであつて、二日と續きは爲なかつた。酒の醉が醒めた時のやうな、つまらなさと頭の痛みをおぼえるのであつた。

『僕は何處までも赤心を盡して居るつもりだが、それがお前には少しも通じないと見える。』

折にふれて恁麼ことも言つて見たけれど、自分で思つてゐた程の感じは與へる事が能なかつた。

『それや能く解つてゐますのよ、だつてね、世間の口がうるさいものですから……。』

藝妓の答へは不得要領であつた。ちやうど暖簾に力押しをするやうなもので、少しの手應へもなかつたのである。

其處で彼は考へざるを得なかつた。沈思默考の末に思ひ付いた一策があつた。それは彼が今日まで取つて來た態度を一變させて見せることであつた。

『僕の態度はどうも煮切らなかつたらしい。頭から藝妓を馬鹿にして掛つてゐた。自分の無理は何處までも通さうと爲たし、隨分譯の解らない振舞もした……今になつて考へて見ると、僕のすべてが氣に適らなかつたらしい。』

恁ういふ自覺をすると同時に、彼が藝妓に對する擧動が變つて來た。口先ばかりでない親切と、心から出た愛情とは、自然と先方の胸にも響いて來たのである。

どんな嫌な事を言はれても、只だもう柳に風と笑つてゐなければならぬ弱い水稼業の藝妓には、その眞心が何よりも嬉しかつた。胸

に顔を當てゝ思ふさま泣いて見たいやうな、然うした氣分にもなつたのである。

『妾ね、近頃つくづく貴郎の御親切が身に泌みて來ましたわ、澤山の最負客は有つても、眞から妾を可愛がつて下さる方は一人も無いのですもの。』

春雨が降つてゐる夜、藝妓は自分の胸中を打明けたのである。

『僕は誰よりもお前が一等可愛いんだよ。』

『それが漸と近頃解りましたわ。尤うこれからは妾は何も彼も打明けて御相談致しますわ。』

『然うだ、お前がさうまで思つて呉れゝば、僕だつて萬事に愛情を盡すよ。さうして何時までも仲よく爲て行かう。』

『えゝ、妾尤うこれでスツカリ安心して了つたわ、今夜はユックリお酔ひなさいな、貴郎のお好きな二上りでも彈きますから。』と藝妓はうれしさうに言つた。

やがて乙な聲でうたはれた小唄の文句は、二人の心と心に何處までも共鳴したのであつた。

◆浮世の常

『姑嫁振る嫁下女を振る下女は釣瓶の縄を振る』といふ俚謠があるが、これは人情の機微を諷したもので、人間社會に於ける愛の欲乏を現はしたものである。その意味は姑が嫁に辛く當ると、嫁がまた下女に情なくし、下女はその不滿の遣場がないので、詮方なしに日夜手にする井戸の釣瓶に當るといふので、何れも愛情といふものに重きを置かない結果である。

第一嫁と姑との間柄は假りにも親子と名の付く以上、姑が嫁を苛めするのが間違つてゐるし、嫁にしても姑に惡感情を有つべき道理がない。加之主人たる嫁が、奉公人の下女に辛く當るなどは弱い者

いぢめと云ふべきものである。

どうせ姑は年を老つてゐるのだから、年若い嫁の爲る事は何彼につけて不行届に相違ない。けれども夫れは經驗に乏しいから是非もない、と半ば諦めて可愛い息子の嫁だからと愛情を注いでやらねばならぬ　嫁にしても亦その通りで、いくら姑が自分に辛く當ると言つて、すねて見たり反抗したり爲る樣子を見せるべきではない。ところが世間の習慣としてそれが中々うまく行れない、といふのが双方に愛情が無いからである。相互に我意を通さうと考へるから爭ひが起る。

主人と奉公人との關係もその通りで、主人だからと言つて馬鹿に威張つて見たり　どうせ奉公人だからと言つて誠意の欠けた事を爲たりしては、迚も圓滿に行くべきものではない。

低級な社會の母親を見ると、自分の子と近隣の子とが喧嘩をした場合に、頭から他家の子を叱りつけたり、先方へ怒鳴り込んで行つたり爲るのを見受けるが、それは我子可愛さのあまりだと言ふ事も能るが、眞に我子が可愛いのならば、たとへ子供であるとは言ひながら、喧嘩兩成敗と言ふ程だから、双方の子に訊き質してから、怒鳴り込みに行くべきもので、一概に他家の子を憎んで掛るといふ事

は善くない事である。其處に愛情の眼が必要になつて來る。自分が我子を可愛がつてゐると同じやうに、他家でも我子を可愛がつてゐるのだから、親子の愛情に變りはない。何方にしても怒鳴り込まれた方が恨みを持つやうになる。

友人間に於てもその通りである。いくら竹馬の友であるからと言つても、相互に愛情が欠げてゐたならば、決して永久に親しく出來るものではない。よし一見して親しいやうに見えてゐる事が有つても、それは表面を裝ふ嘘僞であつて、蔭へ廻つて惡口を吐かれたり爲てゐるのである。

然うでなくても隨分うるさい世の中であるから、社會の一員となつて今日立つて行かうと爲るには、凡ての物に施す愛を有つてゐなければ駄目である。自分さへ良ければ他人は何うでも好いと言つたやうな、利己主義で世渡り爲ようとすると、横合から飛んでもない敵が現はれたりして、不快な忌々しい月日を送らねばならなくなる

人情や行爲や言語のすべてに愛といふものを含ませてゐたならばいくら身は貧しくとも、その人の生活は最善であつて、運も向いて來れば他人からの信頼を厚うすることが出來るのである。

◆縺れゆく糸

最初は水も洩さぬ相思の若夫婦であつたが、何處の間にか二人は何方からも心が離れて行くやうになつて、遂には不吉な別れ話が持上つたのである。

妾は離縁される覺えが御座いませんから、實家へ歸つて行くのは嫌です。」と妻は恁う言つて泣いた。

『私もそれは考へたのだ。別段落度と言つて無いお前を離縁すると い事は、私としても忍びない事ではあるが、恁して一緒に暮し

てゐても、漸次家の中が面白くなくなつて行くのだから、却て今の間に別れて了つた方が双方の爲めぢやないか知らんと思ふんだ。』と良人は氣の進まないやうな聲で言つたが、何故恁うだらうと言ふ疑惑が有つた。

『妾の惡い點はどんなにでも改めますから、そんな談は止して頂けませんでせうか……。』

さすが女だけに、弱く折れて出た。けれども一旦言ひ出した男の口からは、今となつて中止する譯にはゆかなかつた。

『兎に角、實家へ暫時歸つてゐて呉れ、然うしたならば、好い話に

なるかも知れないからね。』

良人にして見ると、折角娶つた妻だから、何うにかして樂しく暮せるものなら、暮して行きたいとは思つてゐた。

『それでは暫時歸つて居りますわ。』

こんな事で實家の敷居を跨ぐのは悲しいけれども、詮方なしに一時歸つてゐる事にした。

いよ〳〵妻が歸つて行つた後で、男は深く〳〵考へて見たのである。さて彼如して家に居なくなつて見ると、今更のやうに物淋しさを感じたのであつた。

『何が爲めにこんな心になつたのだらう……。』

恁うした問題を考へ出した。そして夫の解決をつけたいと欲したのであるが、如何しても具體的の考へが起らなかつた。つまり頭腦の統一が取れなかつたのである。

ところが或日、妻の方から長い手紙が來た。それには秋になつて來た物寂しさやら、家の事が氣に懸ると言ふ。至極愛情の含んだ文面であつた。良人はそれを幾度なく讀み返してゐる間に、フト心付いた事があつた。

『然うだ、それや確に私が惡かつたのだ。恁うして久し振に手紙を

讀むと、身に泌みるやうな氣が爲るんだもの。必と二人の愛が氣懸に陷てゐたに相違ない。』

其處で早速返事を書いて送つた。此手紙が着き次第に歸つて來て呉れ。急に話したい事が有るからと書いた。

その返事を讀むだ妻は豫期しない悅さを感じて、飛ぶやうにして歸つて來たのであつた。

『よく考へて見ると、お互に愛情が無いのではなくて、何時とはなしに氣懸に陷つてゐたらしいんだ。だから私は今日から改めて樂しい生活を營まうと思ふんだが、お前は何う思ふ。』

、『え、、妾もつく〳〵考へて見ますと、餘り調子に乘つて我儘を爲たからだと、今になつて後悔して居りますから。』

それではと言ふので、二人は樂しい家庭の人となつた。

さすがに縺れて行かうとした糸の縁も、恁うして兩人の自覺と改善に依つて、樂しい家庭を復活させることが出來たのである　現在では二人の子供の親として、至極圓滿に暮してゐる。

◆趣味の愛

人と生れて誰しも趣味を願はない者はない。音樂を好むとか自然

の風物を愛するとか、何がなしに趣味を求めて、そしてそれを樂しみと爲てゐる。ところが中には無趣味でありながら一向それを氣にもせず、平氣な顏で暮してゐる人も無いではないが、若し然うした人が有るとすると、其人は花を見てもさまでに美しいとも思はず、月を眺めても左程心を動かしも爲ない唐變木と嗤はれても詮方がない。そんな人に限つて慈悲の心に乏しいから、物を愛するといふ上にも、自然と冷淡になつて行くのである。

冷淡といふ言葉はすべての愛に敵對するものであつて、この冷淡が頭腦に有る間は、どうしても暖かい心を持つ事が能ないと同時に

人から愛されたり親まれたりする事は願つても得られないのである

同趣味に生きるといふ言葉があるが、これなどは確に趣味の愛を得てゐるもので　趣味と趣味とが人の愛を惹起して、それが圓滿に發展して行つたのである。

或る青年と或る令嬢とは、既に親と親との望みで許嫁の間柄であつた。ところが趣味の違つてゐたが爲めに、遂に思ひも設けぬ破滅となつて了つた。

最初令嬢は青年に向つて恁う言つたのである。

『貴郎は妙に趣味といふものを有つて被在らないのね。』

『元來趣味といふ奴は、一種の道樂に過ぎないと思つてゐますから僕は努めて趣味を有ちたいとは考へないのです。』

青年は自分の思つてゐる通りを、正直に言つた。

『何故でせうねえ……妾は趣味といふものが高尚で、そして趣味の爲めに思想も向上するものと思つてゐますのよ。』

『或は然うかも知れませんが、僕にはどうも趣味といふ物に餘り重きを置きません。それよりも寧ろ物質の方に重きを置いた方が、いくら增だか知れないと思ふんですよ。』

『それでは、貴郎は拜金主義ですわね。』

『と言ふ譯でも有りませんが、要之現代は趣味よりも金錢を尊重してゐた方が、間違がなくて宜いんです。』

『妾は何處までも趣味に生きて行きたいと思つてゐます。』

令嬢は恁う言つてから、眞ぐに話題を變へて了つた。それから物の一月も經つと、令嬢は自分の父にこんな事を言つた、『妾ね彼の方との結婚は許して頂きたいのです。彼の方は趣味と言ふものを眼中に置いてゐらつしやらないのですもの。』

『今更そんな事を言ひ出せるものか、小さい頃から許嫁になつてゐるんだから、そんな事で破談に爲る事は出來ないぢやないか。お前もよく考へて呉れなくちや。』

父は一方ならず當惑した。そんな事を言はれては困るといふ顔をした。けれども令嬢は承知しなかつた。

『でも終生全じ家で暮して行くのですから、彼れでは迚も辛抱して行かれません。必と圓滿には行きませんわ。』

そんな風で、いよ〳〵迫つて來た結婚式の日を前に見ながら、到頭破談となつて了つたのである。恁うした令嬢は幾分氣儘な現代思想に囚はれて居るとは言ひ條、趣味を解しない青年の罪と謂ふべきである。

◆虚偽の後姿

『お前に限つてそんな事は有るまいとは思つてゐるんだが、人の忠告を聞くと、或はといふ疑念が起るもんだから』

と恁う言ふ冐頭で、男は女の顔を見ながら、

『お前は私を何だと思つてゐるんだね、一體』

『妾に親切な旦那様だと思つて居りますわ。』

『只だそれだけかね、尤う外に思つてや爲ないかい。』

『いゝえ、別に何も……。』

『イヤ思つてるに相違ない。私を煩さい奴と思つてゐるだらう。』

こんなに言はれて見ると、女は今更辯解する氣にもなれず、顔をそむけて默つてゐた。

『私の誤解かも知れないが、近頃お前は妙に私に對して餘所々々しくしてゐるやうだ、何か氣に適らないことでも有るのかね、有れば遠慮なく言ふが宜い。』

『こんなに何不自由なしにお世話をして頂いて居るんですもの、氣に適らないなんて事は……』

『イヤ然うぢやない……確かに何か考へてゐるよ。』

事實女は考へてゐた。圍ひ者の境涯がつく〳〵嫌にもなつてゐる少々ぐらゐ贅澤な眞似が出來たつて、日蔭の身では滿らないといふことが、つく〳〵考へられてゐた。

『それやね、妾だつていろ〳〵考へては居るんですよ。』

少時すると、視線を落すやうにして言つた。

『今日は何も彼も、お互に言つて了はふぢやないか。』

『え、、ぢや思ひ切つて言ひますよ。』と決心したらしく、

『實は妾お願ひが有るのですけれど、申上げて宜いか惡いかと思つてゐるのですわ。』

男は別に心も動かさなかつたが、『ウム、ぢやそれを聞くと爲ようは早く言ふが宜いよ。』

『あの、妾に今日限りお暇が願ひたいのですが……。』

『ぢや、やつぱり人の噂の通りなんだね？。』

『貴郎から然う言はれると、妾言葉も出なくなりますが、こういふ生活に妾は尤う飽いて了つたのです。』

少し大膽過ぎるとは思つたが、恁う言つて見た。

男は意外に思つた。縱令他に隱し男を有つてゐるにしても、それを明さまに言はふとは考へてゐなかつた。

『そんなに私が嫌ひになつたのか……。』

『そんな譯では有りませんけれど、自由な身になりたいものですから……』と流石に澄まないやうな顔をする。

『好矣、それはでお前の勝手に爲るが宜い。』

詮方なしに恁うは言つたものゝ、男の心は不快であつた。

『自分勝手ばかり申して誠に濟みません。こんな破目になりましたのも、貴郎が餘り可愛がり過ぎて下さいましたから、妾の我儘が大きくなつて來たのですわ。妾何とお詫して宜いか分りません。どうぞ怒らないで置いて頂戴。』

『怒るも怒らないも、恁うなつては私は尤う何も言ひ度うない。』

無論癪にもさわつたが、何うする事も出來なかつた。女が自白したやうに、自分が餘り愛し過ぎた爲めだと思つた。言ひなり次第になつてゐた自分が馬鹿だとも考へた。

女は旦那の目をぬすむと云ふよりも、寧ろ平氣で他の男と會つてゐたのであつた。

◇同情より愛へ

初めは何の心なしに交際つてゐた者が、不圖した事から愛の俘虜

となる例は尠くない。左に記す實例は同情が二人の心を一致させたといふ話である。

界隈切つての評判娘のお糸は、美しい顔や姿に、物優しい氣質とを有つてゐながら、兩親が新平民だといふ事が知れ渡つてからは、誰一人として近寄つて呉れる娘もなく、可惜花の盛りを埋木のやうに、蔭で泣いてゐなければならなかつた。それが爲めに一時ヒステリーのやうになりかけたので、兩親は此上もなく心配して、せめて慰安にでもなるやうにと、少し遠方の先生を選んで、音樂を習はせる事にした。それでお糸も幾らか氣を浮立たせながら、ヴァ井オリ

ンを提げて通つてゐると、同じ門弟の中の一人が、何處から聞いて來たのか、お糸の境遇をよく知つてゐて、誰彼なしに新平民の娘だと言ふ事を喋つたものだ。然うでなくとも、そればかりを氣をしてゐて、若し知れるやうな事があつたら何う仕ようかと思つてゐた矢先だから、悲しさ辛さの爲めに人知れず泣き沈んだ。

『先生、妾都合で暫時休ませて貰ひます。』

他の門弟の來ない時分を見計つて、彼女は恁う言つた。

『然うですか……。』と先生は彼女の顔を見ながら、

『私は貴女がどんな理由でお休みになるかを、よく知つて居ります

よ。世間の口と云ふものは、有ること無い事を噂したがるものです
から、そんな事を氣に爲てゐては、迚も生きて行く事は能ません。
だから貴女は何も知らぬ顏をして居れば宜いんです』と心から同情
して言つたのである。

『ハイ。』と彼女はうれしく涙をこぼして答へた。

それから先生は一層彼女には親切にした。中々敎へない奧の手も
彼女には惜氣もなく敎へた。

『先生、妾何とお禮申して宜いか分りません。この御親切は死でも
忘れは致しません。』

『何もそんなに言ふ程の事は有りませんよ。禮なんか言ふのはお止
しなさい。』とは言つたが、先生の胸には可憐さが有つた。

それから月日が經つに隨つて、先生と彼女とは宛然兄妹かなんぞ
のやうに、極く親しくなつて來た。

『どうも變だと思つてゐたら矢張り然うらしいわ。』

こんな事を一人が囁くと、門弟全部がそれに雷同した。それを何
時しか耳にした彼女は、今度こそは先生にも迷惑が掛つてゐるから
どうしても出入りを止さなければならぬと決心した。

『妾先生に申譯がございませんから、今日限り止さして頂きます。』

言ひながら、口惜涙をホロ〳〵と零した。

『人といふものは何處まで弱い者いぢめを爲ようと云ふんでせう。それに私が獨身で居るものだから、いろんな憶測を言ひたがるんですよ。』と言葉を切つたが、直ぐに又つゞけて、

『私は貴女より早く耳にして、いろ〳〵考へてゐたんですが、私は貴女を苦しめる奴に反抗しやうと思つてゐるんです。それには貴女と結婚しなければなりません。』

『あの妾と先生と……。』と眼を丸くした。

『同じ日本人仝士が結婚するのに、不思議があるもんですか。』

先生は同情を徹底さしたい爲めに恁う言つた。彼女は初めて蘇生つたやうな氣がして、泣いて喜んだのであつた。

◆愚痴と涙と愛火

貧乏人ほど夫婦仲が好いと言ふが、事實に於ては然うである。幾ら稼いでも生活難に追はれるといふ。然うした悲慘な境遇にあると一面から言ふと夫婦喧嘩も絶えない譯ではあるが、底を流れる愛の火は一層強い道理である。それに子澤山と言つて隨分うるさいものでは有るが、子福者となぐさめてゐれば、其處にまた子に對する愛

情も湧くと言つたやうなものである。

生活が不十分なと自然夫婦の間にも不機嫌な顔をするやうになるが、愚痴をこぼしてゐても初まらないと諦めを付けて、出來るだけ圓滿に暮して行かうとする。けれども愚痴といふ奴は何處へでもよく飛び出すもので一度頭を擡げたが最後、雨雲のそれのやうに次から次へと言葉を並べる。

『そんなに愚痴を並べて見たところで、今更詮方が無えぢやないかこれが甘く行くと云ふんぢやなし。』

とうるさ相な顔をして、亭主が恁う言ふと、

『だつて、言はなきや胸の中が苦しくて爲樣がないもの、お前さんは男だから何だけれど、儂の身になつて見りや堪らないよ。』

何處までも生計の責任者である女房は、半ば腹立しさうに言ふ。

其處へ無心の幼兒がそんな事とは知らずに、兩人の方へ這ふて來るとそれを眺めた亭主が、

『餓鬼は罪が無えなア、何にも知らずにうれし相な顔をしてゐらア。』と亭主が膝の上に抱き上げる。

『ほんとにね、こんな時分が一番宜いわね。』

不思不識女房も幼兒の顔に見惚れる。恁うして子に對する親の愛

が油然と湧いて來ると、今迄の愚痴も何處へやら行つてしまはなければならないのである。

まだ世間知らずの若い細君は又しても涙をこぼすものだ。涙といふものにも種類が有つて、悲しい時の涙とうれしい時の涙があるやうに、そんなに感動しない所にでもよく涙含む事がある。

そんな時には必ず若い細君の胸には愛の火が燃えてゐるのである。言ひ知れぬ感情の發作が涙含ますのである。

『何か悲しい事か辛い事が有るのかね。』

『いゝえ、そんな事はございませんわ。』

『でも、お前の眼からは涙がこぼれてゐるぢやないか。』

『ハイ……。』と良人の顔を見詰める。

『泣くといふ事は穏かぢやないね、氣になるよ。』

『どうも濟みません。妾ね、悲しくも辛くもないのですけれど、貴郎の顔を見てゐたら、不知涙が一杯になりましたの。』

恁うした情の發露は彼女自身にも、何故だか分らない時が多いものである。つまり夫婦の愛情が極致に達すると恁ういふ事になるもので、悲哀や不滿があつて泣くのではない。泣くといふよりも涙を溜ると言つた方が適當する。普通に泣く時のやうに息苦しくなつた、

り、泣きじやくりを爲たりしないから、只だ譯もなく出る涙とも言へるのである。

愚痴も涙も俱に女性には附物のやうになつてゐるが、何れも愛といふ春の太陽の如な暖かさには、暫時ではあるがその影を消すのである。

◆愛の執着

凝つては思案に能はずと云ふ言葉があるが、事實物に凝り過ざると、飛んでもない事になるものだ。憎い〳〵と思ひ詰めて刄物三昧

に及んだり、口惜い〳〵と口惜さが凝固まつて遂に自殺をしたといふ話も尠くない。愛の執着といふ奴も中々馬鹿には出來ないもので芝居で演る安珍清姫や清水清玄などを見ると寧ろ空恐ろしくもなる

少年は元來が沈着な方で、少し位の事には物に動じないといふ性質であつたが、彼は隙さへあれば都會の渦卷から逃れて、郊外の靜寂を味うといふ風であつた。そして彼は洋畫を樂む趣味を有つてゐた。それが爲めに彼方此方と寫生にも出掛けて行つた。

春から夏へかけて、ちやうど櫻花が散つて藤が見頃にならうとする折から、少年の胸には一種名狀しがたい氣分、言はゞ物事が遣瀨

ないやうな心持に囚はれた。自分でも不思議なくらゐ、彼の心は動搖したのであつた。暫時はいくら考へてもその原因が解らなかつたが、その時分よく寫生に出掛けて行つた田舍の紅葉茶屋へ行くと、その氣分が忘れたやうに快くなつた。

『どうも不思議だ。自分は一體如何したと云ふんだらう？。』

つく〳〵想ふと、その紅葉茶屋の娘に彼は愛を寄せてゐたのであつた。加之その娘は少年よりは五つ六つも年上、で大して美人といふ程でもなかつた。けれども彼の胸からは片時もその姿が離れないやうにもなつたのである。

『私は此處へお邪魔に來てゐる間は、いつもほんとに愉快な氣分になつてゐます。』とある時、ちやうど母親が留守で、その娘と二人限りになつたので、彼は顏を赤らめながら、不馴な言葉付で言つた。すると娘は直ぐに、『第一靜かですし、四邊の景色が美いもんですからね。』恁う言つて笑顏を見せた。

まさか自分より年下の少年に想はれてゐようとは知らなかつたので、娘は別段氣にも留めなかつた。然うなると少年の心は彌が上にも燃え出した。先方が無心なだけに一層氣が苛立つて、日毎に想ひが募つて來た。

それから二三ヶ月はその紅葉茶屋へ行かなかつた。行けばその時は氣分がよくても、歸つてから胸を痛めなければならないので、彼は寧そ見ないで置かうと思つて、それまでは辛抱しゐてたのであつたが、小春日和の菊の噂が立つ頃になると、立つても居ても居られないやうな、遣瀬なさに囚はれて、彼は遂に手紙を書いて送つた。面と向つては迚も言ふ事が出來ないからであつた。

すると娘からも返事が來た。貴郎のお心はよく解つたから、近い間に是非お遊びにいらつしやい、と言ふやうな事が書いてあつた。

それを讀むだ少年の胸は躍つた。永い間思つてゐた事を漸と打明

けて、そして夫れを聞入れて呉れたのであるから、これほどの喜悅はない。彼はその翌日雨の降つてゐるのも厭はず、殆んど夢中になつて會ひに行つた。

『妾、買物に行くと言つて出ますから、貴郎は外で待つてゐて下さい。』と娘も幾分心を波立せてゐた。

『妾お手紙を頂いた時には、嘘ぢやないかと思ひましたのよ。でも貴郎は隨分やさしい人ね。』と娘は少年と肩を並べて歩いた。少年は少聲、顫はせながら恁う言つた、

『これから僕に姉さんと呼ばせて下さい。眞實の姉さんだと思つて

僕はしたしく爲たいと思ひますから。」

少年の愛は純なものであつた。少しも交り氣のない純な愛情が彼の胸一杯になつたのであつた。

◇逃げてゆく女

一旦夫婦にさへなつて了つたら、それが愛の勝利者であつて、尤うどんな事を爲ても逃げて行く心配はないと、然う思ふのは眞理を知らぬ人の胸中である。いくら以前が戀仲であつたからとて、少しも安心する事は出來ない。飛んでもない事柄から夫婦別れを爲る例

が世間には澤山ある。縱令さうまではならずとも、漸次に圓滿を欠いで行くのは事實である。現在愛の人となつてゐる女でも、男の心次第で醒めても行くのだから、絶えず愛の永續に就いて考へなければならない。

藝妓を妻にしてゐて夫れが逃げ出した後で、その男は恁う言つてゐる。『何しろ左褄を握つてゐた奴は、どうも浮氣だから困る。然しそんな事を言つて差詰君は困るだらうと反問すると、「ナーニ世間に女は澤山に有るさ。彼奴一人が女ぢやあるまいし。』とこんな風にあきらめて居る者はまだ宜いが、寢耳に水のやうに今更驚ろくやうだ

と悲惨なものだ。これなどは昔から言つてゐる、『矢張り野に置け蓮華草』で、そも〳〵そんな浮氣つぽい女を妻にするのが間違つてゐる。藝妓上りの妻に眞目面な世帶の持てる道理がない。

女優とか、仲居だとか、ウエーターだとか然うした種類の女には所詮眞の愛情なんて無いのだから、そんなものに夢中になるのが馬鹿で、逃げて行く女の方が餘程悧悋なのだ。けれども人の心といふものは妙なもので、逃げて行くほどその後を追つて見たいもので、何うにかしてと隨分心を痛めもする。恁うした浮氣者に屬する女には、落着いた眞實を見せたところで、それは何の役にも立たない。

寧ろ冗談半分に外見でも張つてゐる方が增なのである。

純な娘の愛が逃げだした日には、殆んど取返しが付かない。辯解の通じない場合が多いから、何方かと言ふと疑念が晴れるまで默つて見てゐなければならない。だから飽迄も逃さないやうに、日頃から眞面目に愛してやらなければならぬ。

友人同志の愛が逃げて行つた時には、これはうるさくても極力辯解を爲なければならない。これを平氣で捨てゝ置くと再び後へ戻らないやうな結果にもなる。感情が眞面目なだけに、何時まで經つても心の溶ける折がないのである。平素に虛僞と尊大さへ無ければ

そんを事にはならないで濟む。

同じ愛から逃げて行つた女でも、ちよい〳〵後を振向きながら逃げて行く者がある。恁うした場合は執着と盲從を以つて引戻す事が出來るけれども、其處に同情の影が無つたならば、いくら努力をしても徒勞となつて了ふ。決して反抗心を起したり、短氣であつたりしては駄目である。

同情と趣味の力で逃げ出さうと爲てゐる女を、自分の方へ引付ける事は大して難事ではない。あんなに迄思つて下さるんだからとか趣味が同じなんだからとか言つて、自然後戻をしないとも限らない

けれども逃げて行く女に餘り熱心を見せたところで、それは却つて先方に反抗心を起させるやうなものだから、それは考へものである

愛の研究【終】

大正七年十月廿六日印刷
大正七年十一月一日發行

『定價金參拾錢』

著者兼發行者　大阪市北區北梅田町四一三　大橋正次郎
印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四　荒木佐兵衛
發行所　大阪市北區北梅田町四一三　紅陽社

不許複製

大賣捌元
大阪市東區南農人町一丁目一〇
土橋誠文堂

水島京二著

女ならでは夜の明け國の女さまぐ

△菊半裁洋本△頗美本全壹冊△定價五拾錢△送料六錢

すべてが事實の物語であつて、誰が讀んでも興味の深いのは今更言ふまでもない。戀に生き、戀にもだえた女のさまぐには限りない愉快もあれば悲哀もある。其處に花柳と演藝の綾が織りなされてゐるが、言ひ知れぬ憧憬をおぼえさせる！

發行所　大阪市東區南農人町一丁目　土橋誠文堂

終

紅陽社發行